

いま日本各地には七百余りの市民団体があり、それぞれ地域に山積する諸問題と活発に取組んでいます。今回寄稿して下さった「多摩の自然を守る会」は、その中でも特に熱心な活動をしている団体であり、今後私たちが運動を進めていく上で、大いに参考になると思います。

### △特別寄稿▽

## 多摩川のすばらしさ

森 田 英 代

秋には一面に銀色の穂がゆれて訪れる人の心を楽しませてくれた多摩川のスキ野原も、今は、すっかり冬枯れて、川原は寒風にざざ波をたてる水面とともに冬景色に塗りかえられてしまいました。そして、多摩川の土手も、散歩を楽しむ若者たちにかわって、元気いっぱい風上げに興ずる子どもたちと親たちに占拠されています。障害物もなく、心ゆくまで風上げができるこんな絶好な

場所は東京では滅多に見つけることができませぬ。

風上げにも飽きて、土手からそっと川原におりて行くのと、行く手を、一羽、二羽と枯れた葦の草むらからホオシロが飛び立ち、誘われるように歩みを進めると、ツグミ、ジョウビタキ、カワラヒワ、モズ、スズメがあちこちの草むらを飛び交い、チャッチャツというウグイスの地鳴きも聞こえてきます。さらに川原を突っさるようには歩いて行くと、目の前に多摩川の水面があらわれ、岸近くには、きれいな声のハクセキレイが軽やかに飛び、流れの中程には、冬のお客さまのカモとユリカモメが羽を休めて浮かび、足下には、今朝つけたばかりというようにくっつきりとしたサギの足跡が、野ネズミの小さな足跡にまじって見られます。

これだけのことを確かめると安心した私たちは岸辺にそって歩きながら帰りみちにつきます。途中、枯れた葦のみきのカマキリの卵を見ついたり、雨の降った後は、川原にいつのまにか小さな池ができていたのを発見したりしながら……。街の騒音も、ここまではとどかず、カモの飛び立つ水音だけが静寂を破るなどという場所が東